

登録有形文化財

# 畑田家住宅活用保存会年報

No.15 / 2016



## <畑田家住宅活用保存会 2016 年度行事予定>

- 初夏の一般公開と健康フォーラム      2016 年 5 月 22 日（日）  
「身体にやさしい健康体操」      公益社団法人自彊術・指導員      白樫房子、畠山悦子
- 秋の一般公開と歴史フォーラム      2016 年 11 月 13 日（日）  
「世界遺産を目指す古市古墳群成立の歴史背景」      大阪大学文学研究科教授      福永伸哉
- 春の一般公開と第 20 回畑田塾      2017 年 3 月 19 日（日）  
「音楽の世界における日本と西洋の交わり」  
琴      菊佳裕純子、ピアノ      吉山輝、歌唱      畑田弘美
- ぶらり古墳巡り      2017 年 4 月 23 日（日）  
「古代を楽しみ歴史を学ぶ」      羽曳野市文化財保護課参事      吉澤則男

## 寸感—水と情報—

会長 中村貞夫

畑田家住宅活用保存会は平成 27 年度も講師の先生方、会員の皆様方、行事に参加して下さった方々と羽曳野市のお力添えのお蔭で充実した内容の活動を行うことができました。羽曳野市企画の〈三つの古民家スタンプラリー〉では 100 名以上が来宅され、スタッフ一同が今後の新しい活動の可能性を感じることができました。今年度の大事な事業の一つは「むかしの家に学ぶ」の出版です。ご寄稿いただいた先生方、編著者の畑田耕一氏と編集に携わったスタッフの方々のご努力と、会員の皆様の貴重な会費の積立金を財源として成り立っていることを、感謝を込めてご報告致します。

最近、寒暖差の激しい天候や周辺に起こる災害を目の当たりにして、水と情報の大切さを痛感しています。四大文明を川を軸にして描くプロジェクトを始めてから 20 年ほどになります。ナイル川取材の出発前は身の危害とマラリヤなどの風土病を心配しましたが現地の方は皆親切で、マラリヤの予防薬の長期間の服用で身体を痛めたものの、何とか持ちこたえることができました。

ナイル川やインダス川を取材していて一番必要と感じたのは、風土病のことよりは水と情報です。飲み水を確保できなくて、情報の誤った受け取り方をして、窮地に陥ったことが何度かあります。

情報が皆無の、スーダンの首都ハルツームでローカル航空便の往復チケットを買おうとしたとき、不愛想な職員が片道しか呉れず、一言、「unpunctual」と言われ、「時間通りでない」と受け取って出発し、目的地について分かったことは、帰りの便がいつあるか分からない、前日にならないと決まらないということでした。

一週間分のミネラルウォーターとチーズなどの食料はすぐになくなって、隣の村で見つけたコーラとグレープフルーツで飢えをしのぎました。砂漠の中の、メトロノームのような形をしたバルカル・ピラミッドを描こうと車で出かけましたが、砂が柔らかくて進めず、手前の丘を這うように途中まで登りました。水と情報の大切さは彼の地に限ったことではありません。

ちなみにこの時のスケッチをもとにした油彩画は畑田家住宅の主屋の鴨居に飾っていただいております。ご来宅時にご高覧ください。

## 平成 27 年度 事業報告

1. 初夏の一般公開と文学フォーラム 5月24日  
「文学のフォークロア」  
2014 年直木賞受賞作家 朝井まかて
2. 秋の一般公開と文学フォーラム 11月15日  
「連歌の面白さ」  
1977 年下半年芥川賞受賞作家 高城修三
3. 春の一般公開と第 19 回畑田塾 3月27日  
「遺伝子と環境—あなたの未来を変えてみませんか」  
群馬大学生体調節研究所教授 畑田出穂
4. 出版  
「むかしの家に学ぶ—登録文化財からの発信」  
大阪大学出版会 阪大リーブル 52  
畑田耕一 編著
5. 畑田家当主 畑田耕一による教育奉仕活動等  
4月22日 西宮市立西宮高等学校  
6月8日 大阪府立富田林高等学校  
6月11日 兵庫県立豊岡高等学校  
6月26日 豊中市立中豊島小学校  
8月16日 兵庫県立豊岡高等学校  
10月30日 豊中市立第 13 中学校  
12月14日 豊中市立東丘小学校  
1月15日 豊中市立東丘小学校  
1月28日 豊中市立東丘小学校  
2月16日 兵庫県立豊岡高等学校

## 役員

相談役	畑田 勇
会長	中村貞夫
副会長	畑田拓男
事務局長	畑田耕一
幹事	石井智子、奥田 寛、織川久子、 笠井敏光、北山辰樹、渋谷 亘、 畑田直樹、畑田達也、畑田弘美、 矢野富美子
会計	畑田庸雄
会計監査	澤田秀雄、塚本昭光

## 新正会員

久保井亮一	西村洋一	松尾宗好
-------	------	------

## 新特別会員

朝井まかて	高城修三	畑田出穂
-------	------	------

現在の会員数 271 名

現在の特別会員数 60 名

〈表紙写真〉電燈の無いころの座敷の夜を大きな和蠟燭と行燈を使って再現したものである。和蠟燭は芯が太いので炎が大きくて明るい。我が家の行燈は、中央部の火皿に十数センチの和蠟燭を立て、下部には灯芯と菜種油を入れた鉄製の油皿を置いて、両者に火をつけて使う仕組みである。火が風で揺らいたり消えたりしないように、紙を張った木枠がついていて、紙の張替えの時でも行燈が使えるよう、外枠のみ二つ用意されている。但し、この日の実験は、油皿の代わりに直径、高さとも約 5 センチの太くて短い洋蠟燭を使って行った。この写真は、ASA400 で、絞り 8、シャッター開口時間 30 秒で撮影したものである。新聞の見出し語が読める程度の明るさである。筆者が行燈を実際に使ったのは、戦中・戦後の電気の供給状態の極めて悪い時だけであるが、その頃は、夜は 8 時に床に入り、朝は 5 時に起きていたのを、いま懐かしく思い出している。(畑田耕一)

〈本年の行事に参加していただいた方々からの感想文〉

春の一般公開と第18回畑田塾 2015年3月22日(日)

弦楽四重奏「春に寄せて」

ヴァイオリン：松田尚子\*、馬場和子、ヴィオラ：坂口雅秀\*

チェロ：荒木雅美\* (\*大阪交響楽団所属)

但馬出石に春の訪れを告げる初午祭の3月22日。沈丁花の馥郁に誘われて庭に出てみると休眠から覚めたバラが芽吹き、雪柳の小さなつぼみも今にも開きそうな気配を見せている。植物があちこちで動き始める音が聞こえてきそうな陽気に誘われて、冬用タイヤを履き替えたばかりの自家用車を羽曳野市の登録有形文化財、畑田家住宅へと走らせる。3時間ほどのドライブの間にも五感に春が伝わってくる。畑田家住宅春の一般公開に合わせて長屋門をくぐると、すぐ左眼前に枝たおやかに満開の雪柳が迎えてくれる。河内羽曳野は但馬より少し季節が進んでいる。

午後から、恒例の畑田塾が開催された。2000年の第1回から数えて18回目の今回は「弦楽四重奏『春に寄せて』」。1曲目は協奏曲集『四季』より「春」。4名の奏者による素敵なヴィヴァルディの調べに、日々の喧騒をしばし忘れ、心洗われる。冒頭で塾頭の畑田先生が「この家で弦楽四重奏は初めてです。畑田塾では皆さんも勉強するが、今日はこの家自身も弦楽四重奏を勉強しています」と、想像力を掻きたてる含蓄に富むことをおっしゃった。

次に演奏されたハイドンの弦楽四重奏曲第67番「ひばり」は個人的に思い出深い曲で、私の最も好きな曲の一つである。事前に畑田家住宅活用保存会のホームページを拝見して得た情報ではこの曲は紹介されておらず、図らずも畑田家でこの曲と再会することとなった。冒頭の旋律が耳に入った途端、この曲に出会ったときにタイムスリップしてしまった。これまでに足を運んだコンサートホールでのリサイタルとは異なる、不思議な経験であった。最前列に座っているとチェロの弦の振動が目に見える。弾かれた弦だけでなく、共振するその隣の弦の微細な振動までも見えそうな近さだ。畳一枚分先のところで紡ぎだされた音は、高音は天井を回って部屋全体を包み込み、低音は音だけでなく畳を通して振動として下からも直接伝わってくる。まるで家全体が大黒柱を魂柱\*\*とした一つの弦楽器のようである。私たちはその巨大な共鳴器の中で、音楽と場の空気を満喫する。庭に面した掃き出し窓からは春の優しい風がときおり吹き込む。奏者の背後で反響板の代わりをする板戸が、風に吹かれてタイミングよくカタカタと小さな音を立てる。弦楽器に合わせてリズムをとっているようだ。3曲目の弦楽四重奏曲第14番「春」(モーツァルト)になると愈々家は歌いだす。「家もまた、学ぶのです」と

塾頭が言われたことがまさに具現されている。

曲の合間にはヴァイオリンの松田尚子先生・馬場和子先生による実演を交えながらのヴィヴァルディ「春」の解説や、ヴィオラの坂口雅秀先生やチェロの荒木雅美先生の楽しくなる楽器の話に耳を傾けた。通常のリサイタルとは異なった、畑田塾ならではの趣向であった。演奏会の後は実際に思い思いの楽器に触れる機会も作っていただいた。現在の職責を全うしたら、いつかはチェロにチャレンジしてみたいな、と日ごろ漠然と考えていたので、思わぬ機会を得て大変感激し、貴重な経験となった。

最後には贅沢にも四氏の伴奏に合わせて、関西二期会ソプラノ歌手の畑田弘美先生の主導のもと、会場全体で懐かしい唱歌や子供になじみの歌を歌うことができ、奏者、聴衆、そして住宅が互いに学びあい、豊潤な時空を醸すことができた。

住育という言葉がある。住居は単なる雨露を凌ぐための箱ではなく、人間形成のために重要な学びの場である\*\*\*という考えに基づく言葉である。畑田家住宅での豊かなひと時を通して、学びの場としての住宅の魅力を発見することができた。素敵な一日に感謝するとともに、このような素晴らしい取り組みがこれからも続いていくことを切に願った。満ち足りた心持ちで帰宅すると、我が家の雪柳のつぼみも心なしか膨らんでいた。(兵庫県豊岡市 渋谷亘)

\*\*魂柱とはヴァイオリン等の楽器において、表板と裏板をつなげる唯一の棒。これにより楽器全体に音が響くようになる。

\*\*\* 畑田耕一、林義久「文化伝承の教室としての伝統的日本住宅―「住育」の大切さ―

<http://www.culture-h.jp/tohroku-osaka/bun5.html>

◆きょうは、はたただじゅくがありました。はただ先生のいえはひろいのでいろんなところをたんけんしました。そとにはいろんなしよくぶつがいました。いろんながつきがありました。バイオリン、チェロ、ピアノでした。がつそうもしてもらってがつきもさわらせてもらいました。きよはきれいでした。みんなであわせるとめっちゃきれいでした。いちばんたのしかったのはがつきをさわられたことです。おとなになったらぼくもじょうずにひきたいなあとおもいました。さいごおわったら、「がんばりました」で、しょうじょうとオルゴールをもらいました。まもる(弟)ももらいました。

(兵庫県豊岡市 しぶやたつる 小学校1年)

◆ 間近で素敵な音色が聞け、演奏前に曲の説明があったので、知っている曲も今までの演奏会とは違った感覚で聴くことが

できておもしろかったです。弦楽器の知識もなかったのに、楽器の構造がわかったり、実際に触らせていただいて音を出したりと楽しい経験でした。みんなで弦楽器の伴奏に合わせて歌ったのも、声を出して歌うのが久しぶりだったので初めは全然声が出なかったのが歌うにつれだんだん出やすくなる感覚がわかって楽しかったです。最後に演奏してくださったカルテットでの Let it go もとても新鮮で素敵でした。今日はとても充実した時間を過ごすことができました。ありがとうございました。(八尾市 澤田聡美)

◆ バイオリンの音色がとてもきれいでした。楽器演奏体験は顔も身体も固まりました。でも楽しくなり体験して良かったです。(八尾市 宮田琴音 小学校6年)

◆ 初めてバイオリンとチェロを弾いた。バイオリンは思ったより軽く、チェロは肩にブーンと響いてきた。

(八尾市 渡利咲希 小学校3年)

◆ いろいろな楽器があり、いいえんそうだなーと思いました。また見たいです。楽器をさわった時、いい音がして、うまいって言うてくれたからうれしかったです。すごくよかったです。(八尾市 宮田小梅 小学校3年)

## 初夏の一般公開と文学フォーラム 2015年5月24日(日) 「文学のフォークロア」

### 2014年直木賞受賞作家 朝井まかて

畑田塾の近くにある「丹比小学校」は私が在学中、たしか六年生の頃に創立百周年を迎えた、由緒のある学校です。創立は明治五年(1872)と聞きますから、明治政府が発布した「小学校令」以前に開かれた、日本で初めての学校の一つであったのでしょうか。万葉集にも「丹比(たじひ)」という地名が出てくると先生に教えられ、幼な心にも誇らしい気持ちを抱いたことをよく憶えています。

当時の登下校道は田畑の多い、それはのどかな風景に恵まれていました。春はれんげ畑の赤、秋は黄金野の稲穂を眺めながら学校に通いました。二上山の上に昇る朝陽の眩しさと水田から聞こえる蛙の歌、教室の木の床の匂い、木琴の音…それらすべてが今、創作の素地になっています。

ことに私は主に江戸時代を舞台とする時代小説を書いているものですから、四季折々を描く時には無意識のうちに、子供の頃、身近にあった風景を記憶の中に探っているのです。土地の自然、人々の営みが子供の心身をいかに育むのか。そして詩や和歌、小説の土壌となっていくのかを、皆さんと語

り合いながら探してみたいと考えて、お話をさせていただきました。

会場からは作品に対する感想・意見なども交えて、多くの発言があり、熱のこもった話し合いが出来た有意義な会合でした。素晴らしい土地への感謝を込めて。

◆ 私は「花競べ」は読んでいましたが、畑田家のご案内で朝井まかて氏が直木賞を受賞されたことを知り、フォーラムへの参加を希望して受賞作「恋歌」を読もうと思ったのですが図書館で借りられず、手軽に購入出来る「先生のお庭番」を「花競べ」の続き位の感覚で読み始めたら、別の流れに衝撃を受け、急いで「恋歌」を購入して一気に読みました。まだ、「花競べ、お庭番、恋歌」と「恋歌」で止まってしまい、手元に置いてある「ぬけまいる」には進んでいません。

フォーラムで「江戸の花と緑」の話をお聞き、他の作品も読んでみたいと思いました。

お話で出てきた江戸時代に作られたと言う1本の菊から百種の花が咲せられたように、朝井まかてさんの根から種々の作品の花が咲くのではと期待し、花が開く環境になることを願っています。

若い人達(といっても50歳代以下)が集まったフォーラムで気付いたことですが、講演内容を「スマホ」で記録されていることです。パソコンで入力しておられるのは学会などで見ましたが、もう「スマホの時代」になっているんですね。

新旧入りまじった畑田塾の文化交流の発展を祈り、お礼を申し述べるとともに、先生をはじめ皆様のご健康をお祈りします。(豊中市 浜中佐和子)

◆ 本を読むのは好きではあるものの、今まで時代小説など読んだこともなく、ましてや朝井まかて先生の名前こそ知ってはいるものの、作品は全く知らずの私でした。

今回、このフォーラムに参加するにあたり、朝井まかて先生のデビュー作「花競べ」を読みました。江戸の風俗や植木商の仕事、そこにはからむ人間模様、あつという間に作品に引き込まれ、調子にのつてもう1冊「ぬけまいる」も購入しました。

フォーラムで、江戸の園芸をテーマに小説を描くことになったきっかけに、先生が育った羽曳野の豊かな自然が大いに影響していることをお話されていました。生まれ育った環境が、後の人生に何か関わってくる可能性があることを考えさせられました。私は奈良で生まれ育ちました。子どもの頃は、田んぼや畑もたくさんあり、小学校への通学路ではと

んぼ、蝶、カエル、蛇なども遭遇し、逃げたり、つかまえたりと楽しみました。奈良は雪もよく降り、多いときはかまくらを作ったこともありました。

日本は、四季のある国で季節ごとに異なった趣を感じることが出来ます。当たり前のことのように思っていますが、本当にこのまま四季は失われることなく日本に存在するのか、昨今の地球温暖化の異常気象を考えると心配になります。

「世間師」とよばれる人が地域から地域へ旅してお話をし、後に噺家、浮世草子作家がその役割を担っていったとおっしゃっていました。古くから伝わってきているものを後世に伝えていくことは、現代に生きる私たちがしなければいけないことです。小説の中にその世界を描くということは本当に素敵なことです。私にはそのような文才はありませんが、幸いにも国語教師という立場にありますので、古典作品をとおして昔の風俗、自然、そして人々の思いを味わうことの楽しさを伝えていきたいと思えます。

フォーラムでは楽しくお話をきかせていただき、またいろんな方のお考えを聞くことができ勉強になりました。素敵な時間を過ごさせていただき、ありがとうございました。

(西宮市立西宮高等学校教諭 北村隆枝)

◆ 私が朝井まかてさんのお話で一番印象に残ったのは、「読者の既成概念がどこまでかをあてこむ」というくだりでした。

そもそも私がなぜ今回の文学フォーラムに参加したかと言いますと、実は私、学業のあいまに小説を書いております。プロを目指して、新人賞に応募したりもしています。そのため、今回は実際にプロで書いておられる方のお話を聞けるということで、参加いたしました。どのお話も、これから作家をめざすうえでいい刺激となり、参加して良かったなと思ったのですが、特に心に残ったのが前述の部分でした。

今回のお話の中で、それが大切なことだというのを改めて感じさせられました。特に朝井まかてさんの場合は時代小説ですから、それが顕著なのでしょうが、私が書くような現代を舞台にした小説でもそれは同じだと思いました。これから書いていくうえで、大変勉強になりました。貴重な体験でした。本当に、ありがとうございました。

特に今回は他の参加者のほとんどが年齢を重ねておられる方々だったこともあってか、ふだんの授業や講義とは少し違ったお話を聞けました。

いつもは同世代の人間とばかり交流しているので、新鮮で、またいろいろと勉強にもなりました。

本日は本当に有意義な時間をありがとうございました。また機会がありましたら、よろしく願いいたします。

(市立西宮高等学校2年 小杉葵乃)

◆ 5月24日の畑田家訪問は2年ぶりになるのだろうか。思っていたように涼風が体を擦りぬける旧家で、直木賞受賞の歴史小説家・朝井まかてさんのお話をお聴きした。江戸時代の花がテーマのひとつで、それはソメイヨシノから始まった。花だけをめでる為に葉の生育を人為的に遅らせた愛玩種という宿命を持つソメイヨシノ。

さて、日本では単に花と言えば桜の事だと言われるぐらい、日本人は桜が好きである。桜の四季ともなれば、「おはようございます」の挨拶に続くのは決まって「桜」の話題だ。何故それほどまでに日本人を惹きつけるのか、その魅力の源はなんだろうか、花の美しさ？ それとも儂い命、あるいは潔さのせいだろうか。いずれにしても、私は滋賀県の田舎生まれで、実家近くの堤防には10本ほどのソメイヨシノが植わっており、学校へ通うときも、仲間と遊びまわる時でも自然と目に入っていた。つまり生活の一部だったから、大阪へ出てきて「桜・桜、花見・花見」と騒ぐ街の人々がとても奇異であった。(余談だが、この堤防で、花菱アチャコ、浪花千栄子出演の映画のロケが行われたことも懐かしい思い出である)

とは言え一回だけ、このような世界があるのかと、その風景に驚かされたことがある。昭和34年に大阪へ就職したのだが、ある夜、先輩に連れられて造幣局の通りぬけに行った。人混みにも吃驚させられたが、漆黒の上空と煌々と照らされる何十種類もの桜の明るさとのコントラストに圧倒された。田舎育ちで夜は暗いものであるとの刷り込みのある身には別世界であったのだ。

ところで、八尾に住んで50年になる。市域を流れる玉串川の沿道には約940本のソメイヨシノがある。この桜並木は1965(昭和40)年1月に沿道の住民が、一口500円を寄付して桜を植えたのが始まりである。市民による市民の為の桜であるが、早や50歳を迎えた。つまり私が八尾に移り住んだ年に植樹が始まったのである。一般的にソメイヨシノの寿命は40~50年と言われているので、玉串川の桜の将来が気になる場所である。

(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 池上和彦)

「連歌の面白さ」 1977年下半期芥川賞受賞作家 高城修三

高城さんは、現在、高城修三連歌会の宗匠であり、古代史フォーラムを主宰なさっています。著書「可能性としての連歌」で、連歌とは場の文学、共同の文学であると定義づけられました。寺田寅彦は、連歌を映画のモンタージュになぞらえて説明していきまして、映画の1カットを一つの句に対応させています。高城さんは、「連歌は異質なものを出会わせ、思いがけないイメージや発想を生み出す装置である」と仰っています。連歌では同じイメージを出すことは輪廻と言って、避けなければなりません。異質なものを、別々なものを出会わせるのは芸術の本質であり、根本であるとのことでした。

連歌の歴史については、古今和歌集以降、上の句5、7、5に下の句7、7を付けたり、下の句7、7に上の句5、7、5を付けるということが行われ、新古今和歌集ができた頃に100韻連歌ができ、鎌倉時代初めから江戸時代の幕府があった700年間に、国民的文学として発展していったことが話されました。

しかし、明治26年に正岡子規が「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」として連歌形式の文学を否定しました。西欧近代文学は個人が個性的に表現したものであり、著作権が成立し、活字で表現したものであるのに対して、連歌は「場の文学」「共同の文学」であり、音声で表現するものでした。日本が近代化するにあたって連歌は消され、バラバラに解体されて、発句が俳句になり、連歌の途中である前句付け(7、7に5、7、5を付ける)の5、7、5の部分の部分が独立して川柳になり、明治半ばから個人が個性を表現するものとして、俳句と川柳が国民的文学になったそうです。

芭蕉は連歌師であり、連歌を詠んでいたのですが、芭蕉の没後200年たって、連歌の中の発句が俳句として紹介されることになったのです。

次に「連歌をつくる」ことについての説明がありました。例えば、発句が昼の大きな風景だとすると、2句目(脇)は1点にフォーカスし、3句目は夜だが真っ暗にはなっていない時を詠む、というように転じていきます。また付け句がおもしろいと、ありふれた前句との間にすばらしい連歌の世界が生れることもあります。前句をきっちり受け止め、自分の世界を展開します。日本の連歌形式の文学は日本独自のものであり、外国には無いとても重要な文学である、とのお話でした。

連歌は、風景のよい所で良き仲間とおいしい食べ物やお酒をいただき、楽しんでするものであり、連歌の場では、香をたき、季節の花を向け、お茶をいただく、文化交流の場でもあるとのことでした。

お話の後の質疑応答に次いで、参会者が高城先生のご指導をいただきながら、連歌作りを楽しみました。(石井智子)

◆ 連歌とは、575～77～575～77・・・と、集まっている人が順に句を詠む、という知識しかないまま、芥川賞作家、高城修三先生のフォーラムに参加しました。

お話を聞いて、「連歌ってそういうことだったのか」と驚きの事柄が数多くありました。まず、松尾芭蕉の有名な句が連歌の発句だったとのこと。「さみだれをあつめてはやし最上川(連歌の発句ではあつめてすゞし、だった)」「古池や蛙飛び込む水の音」などです。

私が芭蕉の句で一番好きなのは「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」ですが、これも連歌の発句だったそうです。この句がなぜ好きかといいますと、「閑かさや」だからです。若し、これが「閑けさや」だったらどうでしょう。単にそのあたりの風景を読んだに過ぎないと思います。しかし、「閑かさや」としたことにより、まわりの風景の他、詠んだ場所である山形県の立石寺の宗教観やご自身の心の内面までも表現していると思うのです。たった一字、「け」と「か」の違いで幅広さが全然違ったものになっています\*。そこが好きなのです。この句が発句とすると後に続くのはどんな句だったのかと想像すると楽しくなってきます。

そして連歌を作る場合、すぐ直前の句のみを引継ぎ、それ以前の句は完全に引き離さなければならない、という決まりがあるそうです。初心者はそれが難しく、つい直前以外の句も意識してしまいがちなので注意して欲しいとのことでした。

フォーラムの最後に参加者が皆で実際に連歌を作ってみました。先生が厳しくチェックされ、多くが不合格となりましたが、出来上がったのは、冬の雨松を支える杭一つ 歌を詠み合う古民家の庭 彼方には大山ばかり見えていて 懐かし友と語り歩まん、以後2句ぐらい続いたと思います。

実は、懐かし友と語り歩まん、は私が出した句です。1回で通り、嬉しく、連歌が楽しくなりました。

先生は人生に円熟味を増した人が、ボケ防止に最適、とおっしゃいました。司会者の畑田先生は、学校教育で取り上げてはどうか、との意見を出されました。しかし高城先生はそ

れにはあまり賛同されませんでした。私は畑田先生と同意見です。最近、小・中学生の心の荒廃ということをよく耳にします。是非、小・中学校の情操教育に役立てたらいいと思いますし、子供ならではの素晴らしい発想が生まれるのではないかと思います。(豊中市 関谷洋子)

\* 「閑かさ」を人が自分が居る環境をいろいろな観点から見て静かであると感じる心の状態を強調したい場合に使い、単に物音がしない状態を表す「閑けさ」と区別することがある。

(<http://textview.jp/post/hobby/10048> 参照)

◆今日は高城先生から「連歌の面白さ」の話をお聞きした。心に残ったこと、お聞きしながら考えたことを以下に示す。

- ① 「芭蕉は俳句を詠んでいない。」えっ本当！俳句は正岡子規からがスタートで、芭蕉が詠んだのは発句、それを過去にさかのぼって俳句としてしまったのが真相。近代化の裏話というところか。
- ② 和歌と短歌の違いも一筋縄ではいかぬようだ。でも端的に言うなら、和歌は歌ことばしか使えないが短歌は自由。漢語も外来語も使える。
- ③ 和歌、連歌、俳諧、俳句、川柳そして短歌とすべては日本文学としてつながっている一体のようなものということを知った。5音、7音のリズムを特徴とする「日本の詩」なんだ。
- ④ この話を聞きながら、なぜ5音や7音に私達は心地よいリズムを感じるのだろうと思った。家に帰って調べたが確固たる定説は無いらしい。不思議だが面白い。
- ⑤ 連歌は日本の詩の中でも中心的存在、「異質を出会わせる装置」という。コラージュもモンタージュも同じ。芸術そのものが異質の出会いから生まれるものらしい。ますます興味深い。素材と素材が会って料理ができるのも、人間が生きることもすべて同じに見えてきた。
- ⑥ 連歌の奥義は「場を楽しむ」「面白がる」。これからの新しい価値観を創造する上でとても参考になりそうだ。

(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 神野武男)

◆この度の催しを開いてくださった畑田先生を始めとした関係者の皆様方には感謝申し上げます。私は高城先生より、連歌には長い歴史があって、その後、俳句の元祖になったことを教えられ、おおいに興味を持ちました。そして実践では皆一人一人が考えることができ、退屈せずに居られるという、まさに連歌の醍醐味の一つを知りました。

実のところ私はちょうどこの先、短歌を始めてその中での仲間作りと共に、より良い人間関係作りができればと思っていました。

この度、私は連歌が全て共同作業で成り立つという一連の流れを知り、私の夢は短歌よりもむしろ連歌の中でこそ実現可能だと思に至りました。これからは西宮での連歌会に参加させていただきつもりです。有難うございました。

(羽曳野市 岡本勝昭)

◆ 11月15日(日)午前雨模様の中、当主畑田耕一様直々のご説明で、事前資料の「明治時代の屋敷構えの趣をよく残し・・・」を思い出しながら、長屋門から蔵(2つ)、納屋へと続く外観からの説明に、耳を傾けました。その屋根瓦は建築当初からのもので、雨に濡れ黒く輝いて見えました。蔵入口の鼠返し、蔵・納屋の庇を長くして軒下で手作業が出来る工夫、そして主屋の台所の竈、作業場の人力米搗き具、水汲みの人力補助水車等が大切に保存され、当時の暮らしの様子が伝わってきました。主屋の大屋根を支える太い大黒柱2本、タイコ梁ほか、そしてそれらを組み立てる匠の技のすごさを思うに、感動すら覚えました。今や貴重な松材の差鴨居に見入りながら、和室の落ち着きとぬくもりに浸りました。仏間から中庭に目をやれば、長屋門・蔵をバックに、年季の入った松が、幹を斜めに伸ばし、一本の杭が支えています。この貴重な畑田家住宅を保存・維持されて来られた御当主のご苦労が重なって見えました。

午後からの文学フォーラム「連歌の面白さ」に参加し、高城先生の連歌のお話は、大変勉強になりました。質疑応答や連歌の発句から実作も、活発に手が挙がり、熱のこもったやりとりで有意義でした。数ヶ月前から連歌会に参加している一人ですが、歴史ある連歌が広まってゆくことを願っています。この畑田家住宅が末永く保存・維持され、有意義な会場で活用されますことを願っております。

最後に当主畑田耕一様の益々のご活躍とご健康を祈念申し上げます。(西宮市 森幸一)

春の一般公開と第19回畑田塾 2016年3月27日(日)

「あなたの未来は変えられますか―遺伝子と運命―」

群馬大学生体調節研究所教授 畑田出穂

この行事の感想文は編集の都合上、次の年報に掲載します。



## 畑田塾の益々の発展を祈る

奈良県立医科大学名誉教授 大崎茂芳



畑田塾では、2010年3月21日に『クモの糸の不思議』というタイトルでお話をさせて戴きました。クモは多くの人から嫌われていますが、古くから人間の生活圏で共存していたことから、親しみを持つ人も多くいます。ところが、クモの糸となると意外にも研究されておらず、神秘的なベールに覆われたままの状態でした。そのような状況で、過去40年にわたって秘密のベールに覆われたままのクモの糸の不思議な事柄を少しずつ解き明かしてみました。その中で、柔らかく力学的に強く、耐熱性で紫外線耐性というユニークな特徴を持つ素材であり、また、素晴らしい危機管理術を備えていることが分かってきたことをお話しさせて戴きました。また、細かいクモの糸は強いと言っても、人間の実感としては受け入れがたく、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』にあるクモの糸にぶら下がるシーンでも、あくまでも小説の世界の話です。そこで、クモの糸の強さを人間の実感として捉えるために、ヒトがクモの糸にぶら下がることに成功した苦労話もさせて戴きました。

畑田塾は小学生から学識経験者まで多岐の分野にわたる専門家を含むメンバーが、異文化をバックグラウンドとしておられるためか、様々な角度からの生き活きた質問は、私にとっても非常に良い勉強になりました。また、歴史ある畑田家の畳の部屋は、演者と塾生とが質問しやすい距離にあり、質疑応答の時間を十分にとり、実質的理解が深まる雰囲気は非常に素晴らしく感じた次第です。最後に、創造性を生み出す原点でもある異文化の融合と教養という素晴らしい視点を持っておられるフォーラムと塾の、ますますの発展を期待しています。

なお、畑田家を訪ねたのは、クモの糸で使用に耐えうるヴァイオリンの弦を作るために自らレッスンに通い始めた月でした。そのため、クモの糸の弦によるヴァイオリンの話はできる段階にはありませんでした。それから6年後の今、悪戦苦闘の末、クモの糸で切れにくいヴァイオリン用の弦作りに成功しました。この弦を装着すると10万円程度のヴァイオリンでもストラディヴァリウスに遜色ない音色の得られることが専門のヴァイオリニストにより裏づけられたことを報告させて戴きます。

### 平成27年4月1日から平成28年3月31日までの収支決算

収入の部	
前年度繰越金	1,168
会費	473,000
寄付金*1	296,000
雑収入	22,900
別途積立金より	460,000
合計	1,253,068

支出の部	
講師謝礼	82,703
年報作成費	59,292
出版書籍購入費	691,200
通信費（郵送料、振替手数料等）	98,128
事務用品費	23,112
雑費	22,686
別途積立金*2	250,000
次年度繰越金	25,947
合計	1,253,068

\*1 田中祀子、神野武男、浜中佐和子、畑田出穂の4氏より御寄附を頂きました。感謝申し上げます。

\*2 当会出版書籍の出版のための積立金

事務局 大阪府羽曳野市郡戸 471  
畑田庸雄 電話 072-762-7495

E-mail [hatada@wombat.zaq.ne.jp](mailto:hatada@wombat.zaq.ne.jp)  
畑田家住宅活用保存会ホームページ  
<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/>

別途積立金*2	250,000
---------	---------

会計監査： 会則第6条の規定に基づき平成27年度の収入及び支出に関し、決算並びに関係書類を厳正に監査した結果、いずれも適正かつ正確に処理されていることを認めます。平成28年3月31日 監査担当 澤田秀雄<sup>印</sup> 塚本昭光<sup>印</sup>  
会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名：畑田家住宅活用保存会)へお願いいたします。

あとがき： 年報 No. 15 をお届けします。本年度も、皆様のご協力のお陰でフォーラムと一般公開を行なうことが出来ました。厚く御礼申し上げます。また、羽曳野市の「古民家めぐり - スタンプラリー」にも協力、成果を挙げました。本会の活動の成果を示す書籍「むかしの家に学ぶ」は大阪大学出版会の阪大リーブルシリーズ 52 として出版されました。本年報と一緒にお届けしますので、ご笑覧下さい。来年度もよろしくご支援の程お願い申し上げます。(KH)